

# 用意の書と率意の書

河内 利治(君平)  
Toshiharu (Kunpei) Kawachi

二〇一四年四月三〇日から五月六日まで奈良県文化会館で開催された『今井凌雪―人と書のすべて―』展(奈良展)に続いて、七月二五日から二九日まで上野の森美術館でも同展(東京展)が開催された。一九二二年二月一九日生、二〇一一年七月二六日享年九〇歳で逝去された恩師凌雪先生の三回忌を兼ねた回顧展である。

奈良展初日にあわせて雪心会編の書作品集『今井凌雪―人と書のすべて―』と刻印集『凌雪印存』が刊行された。書作品集には、藤岡都逕会長「今井凌雪―人と書のすべて―開催にあたって」と田宮文平氏「今井凌雪とその時代」の二文、【作品】七五点、【臨書】として(張翰帖)〈芻鼎〉(鉄山刻経)〈牛樵造像記〉(孫過庭・書譜(卷子)〉(趙孟頫・度人妙経)〈敬客・王居士埵塔銘〉(孫過庭・書譜(冊子)〉(淳化閣帖卷九)〈淳化閣帖卷一〉(集王聖教序)〈九成宮醴泉銘〉(王寵・行書冊)〈何紹基・金陵雜述〉(殷周金文)の全臨と、(蘭亭序)〈南宋高宗・孝女曹娥碑〉(南宋孝宗・法書贊)〈趙

孟頫・蘭亭十三跋)〈王寵・行書冊)〈王羲之・十七帖)〈孫過庭・書譜)〈召伯虎殷)〈曹全碑)の半紙臨書(『新書鑑』誌に掲載された御手本)、ならびに【生活の中の書】として書籍題字・陶器作品・表札・出版物・こだわりの文房具・自用印、「率意の書」と「書の表現」の二文、そして【釈文】【年譜】が収録されている。

凌雪先生の二文「率意の書」と「書の表現」は、『書と人と詞―真行草のすがた』(日本の美と文化)第6巻・講談社一九八三年発行)よりの転載で、数点の図版を加えたものである。

「率意の書」は、「良い書の条件」「用意の書と率意の書」「熟中の生、生中の熟」「名跡に見る用意と率意」を柱に綴られているが、「用意の書と率意の書」の末尾には次のように書かれている。

こうした自らの制作過程を振り返ってみると、われわれは、行き届いた用意の書であり、しかも、率意の書であるもの、つまり、心

技一体の境地を追い求めているのだと思う。そうすると、用意の書と率意の書は対立概念ではなく、互いに他を補う、勝れた書の条件ということになる。最初の一枚は、文字どおり、白紙に書くわけで、新鮮な書になることが多い。何枚も書くと、前にうまくいったところを再現しようという欲が出て、自由さがなくなる。一枚めは何のこだわりもなく、心の閃きに応じて書くから、生き生きした書になるのである。／制作意識を持つている場合でもそうであるから、他の目的で何気なく書く場合は、より率意性、即ち、こだわりのない自由さが出ると思う。こうしたことから考えると、いきなり書くとか、草卒の間に書くとかいうこと、即ち、卒意の書であることが、こだわりのない書、即ち、率意の書の条件になる。実際、自分の周囲を見ても、準備構想には手間と時間には十分にかけるけれども、作品そのものは、せいぜい数枚で仕上げるという人が多い。

——『今井凌雪—人と書のすべて—』一六四頁

右傍線部は稿者が付したものだが、これから歴代書論の二文を想起する。

心急にして執筆緩なる者有り、心緩にして執筆急なる者有り。執筆近くして緊なる能はざるが若き者は、心手齊（かな）はず、意は

後に筆は前にする者は敗れ、執筆遠くして急なるが若く、意は前に筆は後にする者は勝つ。——衛鏖「筆陣図」

凡そ書は沈静を貴び、意をして筆の前に在らしめ、字をして心の後に居らしめ、未だ作らざるの始めに思を結びて成すなり。——王羲之「書論」

「意前筆後」「意在筆前」、すなわち作品制作には先ず構想を練り、書く前に胸中に構想ができてから筆を執らねばならないというものである。

心と手の関係を图示すれば次のようになろう。

「心」＝「意」

「手」＝「筆」＝「技」

よって、凌雪先生のいう「心技一体」になるには、まずは基礎的鍛錬（工夫）を積み重ねた「手」＝「筆」＝「技」による「用意の書」をもってして、「意前筆後」「意在筆前」の境地で卒意に書いた「率意の書」であらねばならない。それが「対立概念ではなく、互いに他を補う、勝れた書の条件」である。言い換えれば、「用意の書」は「率意の書」の前提条件である。

拙作は、太平天国の乱を鎮圧し、曾国藩や李鴻章らと共に軍備強化のため洋務運動を推進し、「清代最後の黒柱」と呼ばれる左宗

棠（二八一二〜八五）が篆書で書いた文語（出典未詳）を、はじめオールドックスな隷書で書いてみた。しかし書けば書くほど「用意の書」の呪縛から脱出できない。漢碑のなかでも八分をベースにしたが、「於」字三字を変化させたり、「冬」字を篆書にしてみたり、試行錯誤を繰り返した。

使用した筆は、杭州宣和の「宣和石籜（中）」という狼毫。通常は純羊毫を用いるのだが、ふと十年ほど前に杭州で購入した筆を使った。墨は平成四年製「書鑑」、紙は紅星牌二層夾宣である。

数日に分けて十数枚ぐらい書いたところで、紙を薄口の夾宣に換え、書体も行草に変えて一気呵成に書いてみた。それが本作である。第一行三字目「之」と四字目「本」字がくつつき、「本」字右下部の空間が広がったこと、第二行三字目「長」字が大きくなり傾いたこと、三行目下三字がやや軽くなったこと、渴筆に難が有るなど、気になる点がいくつも有るのだが、「用意の書」の呪縛から辛うじて抜け出した気になった。「率意の書」にはほど遠く稚拙だが、一枚だけサツと書いたので「卒意の書」であるとは思っている。



172×69.1cm

生、物之本、必資於培植。无為善長、仁為性體。  
 發育万物、斂於冬而熾於春。